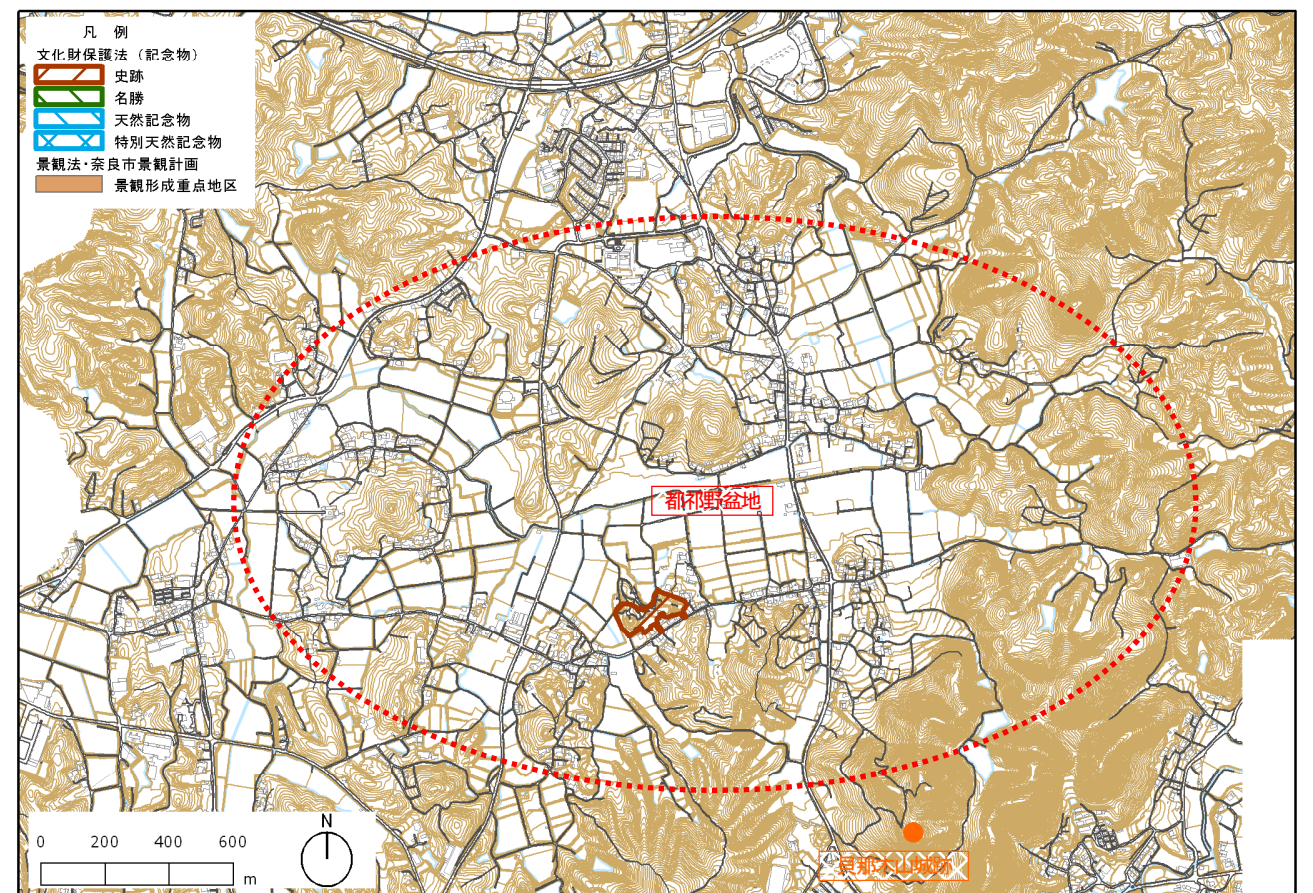
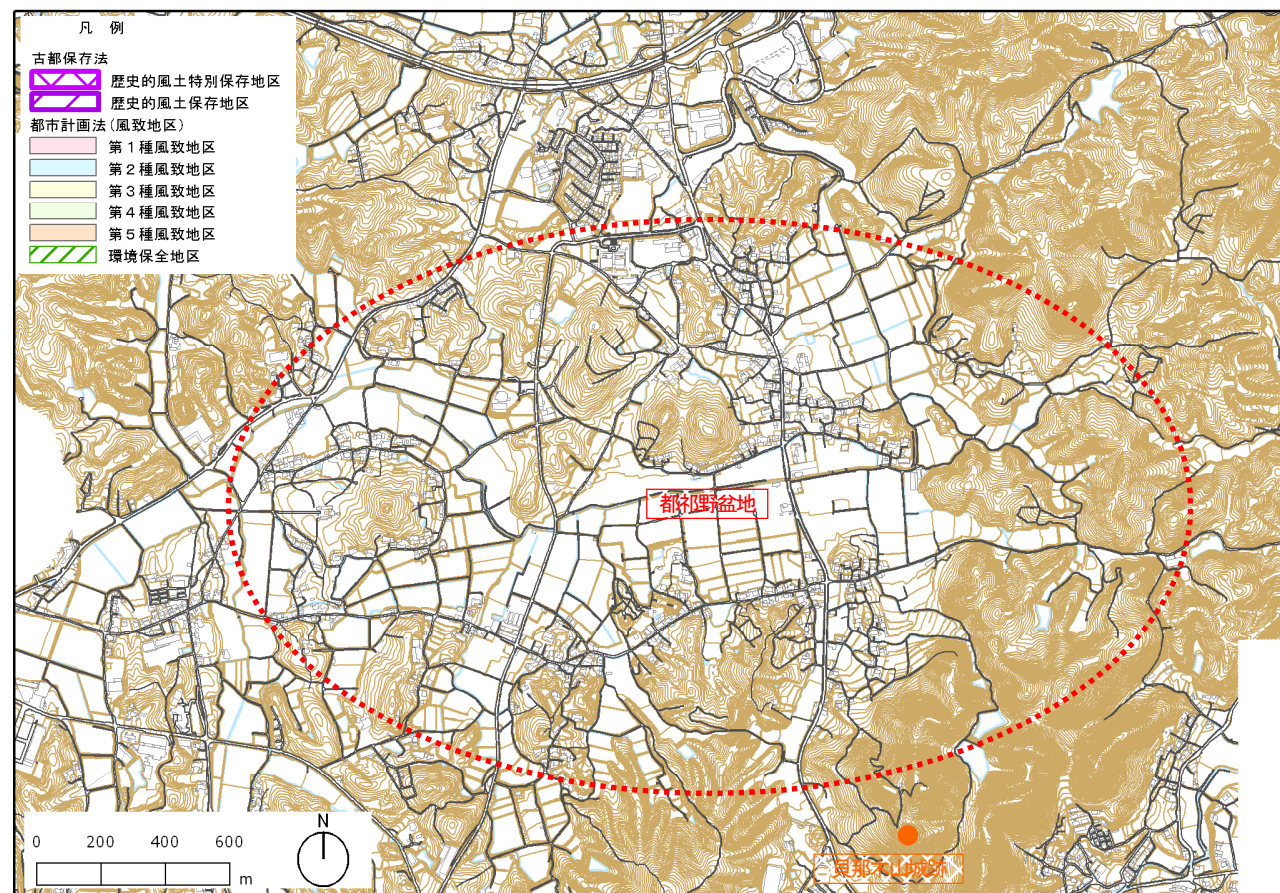
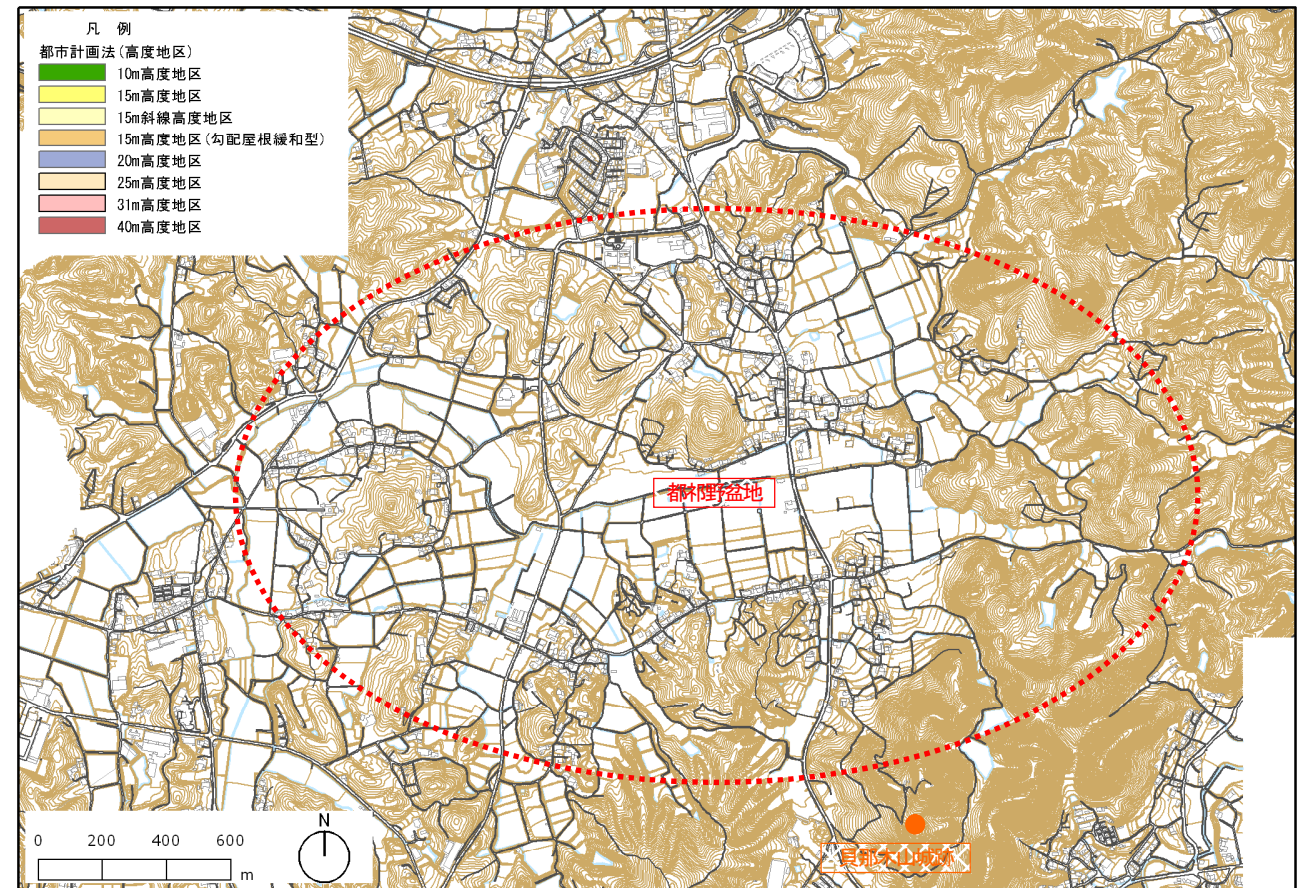
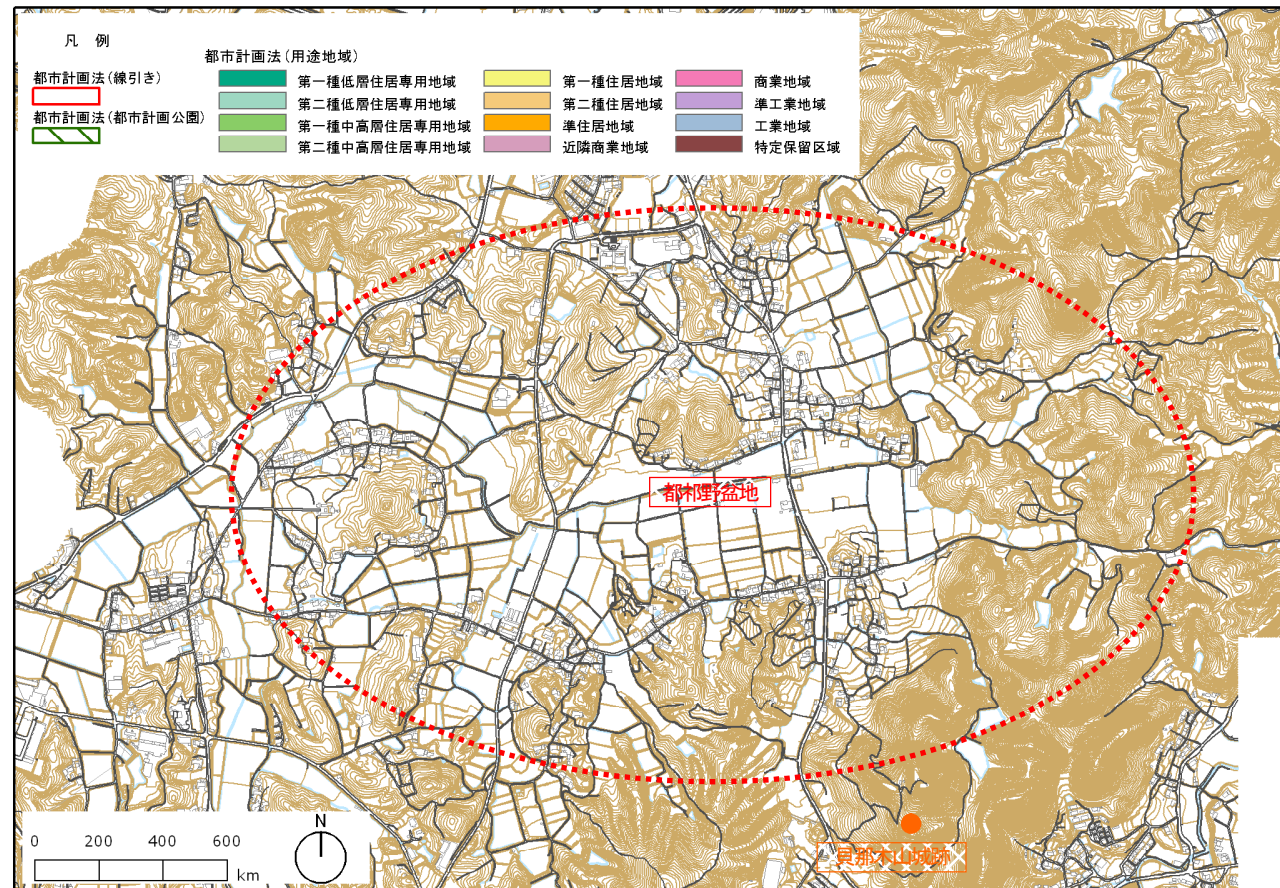


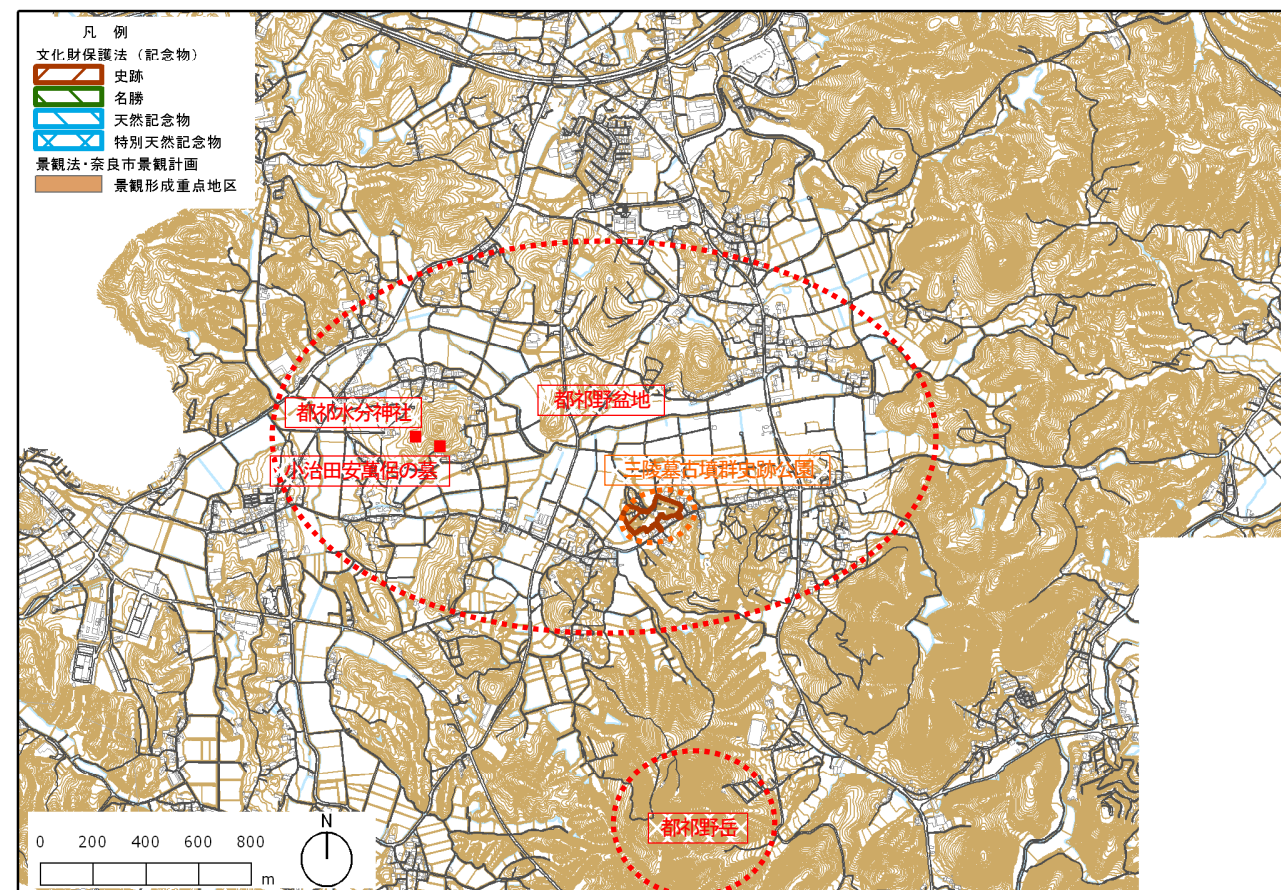
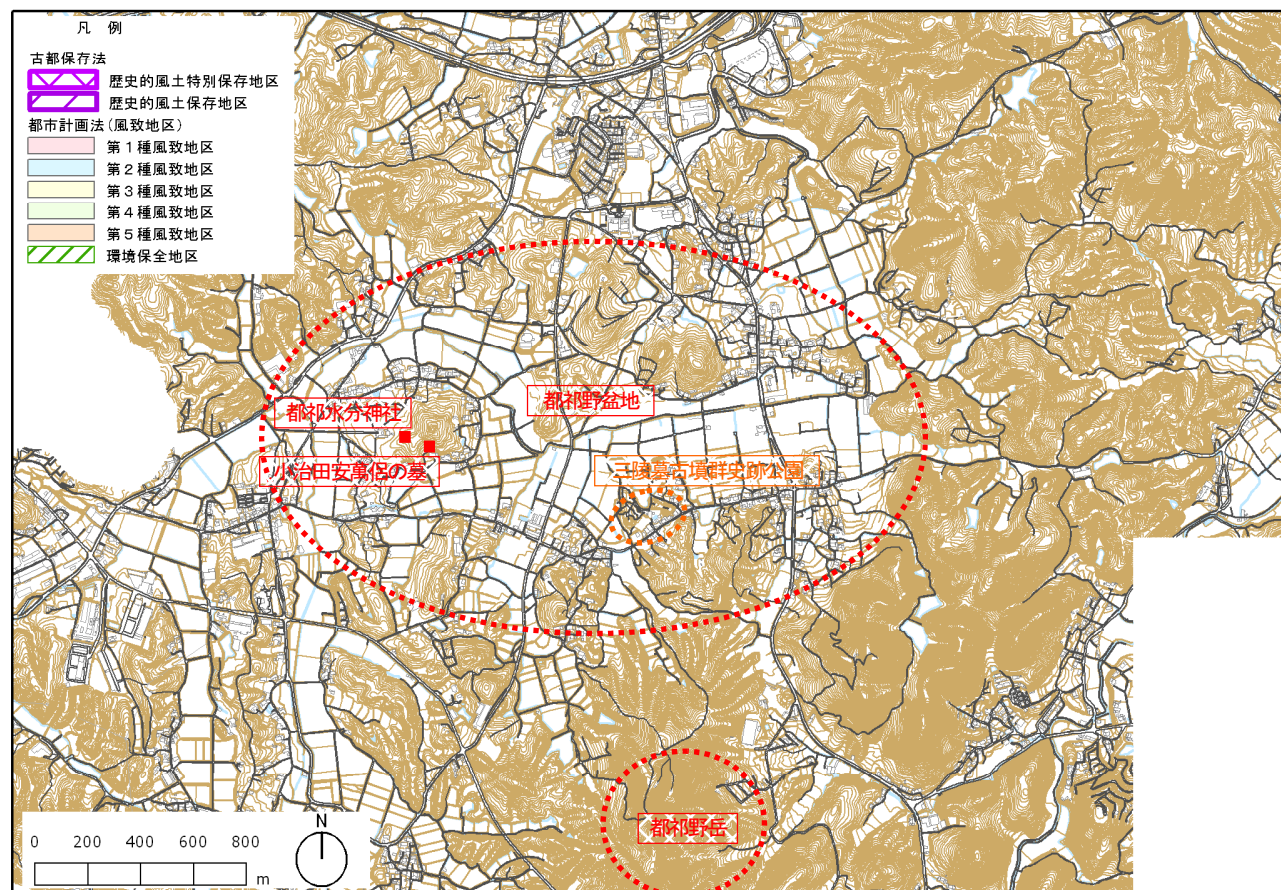
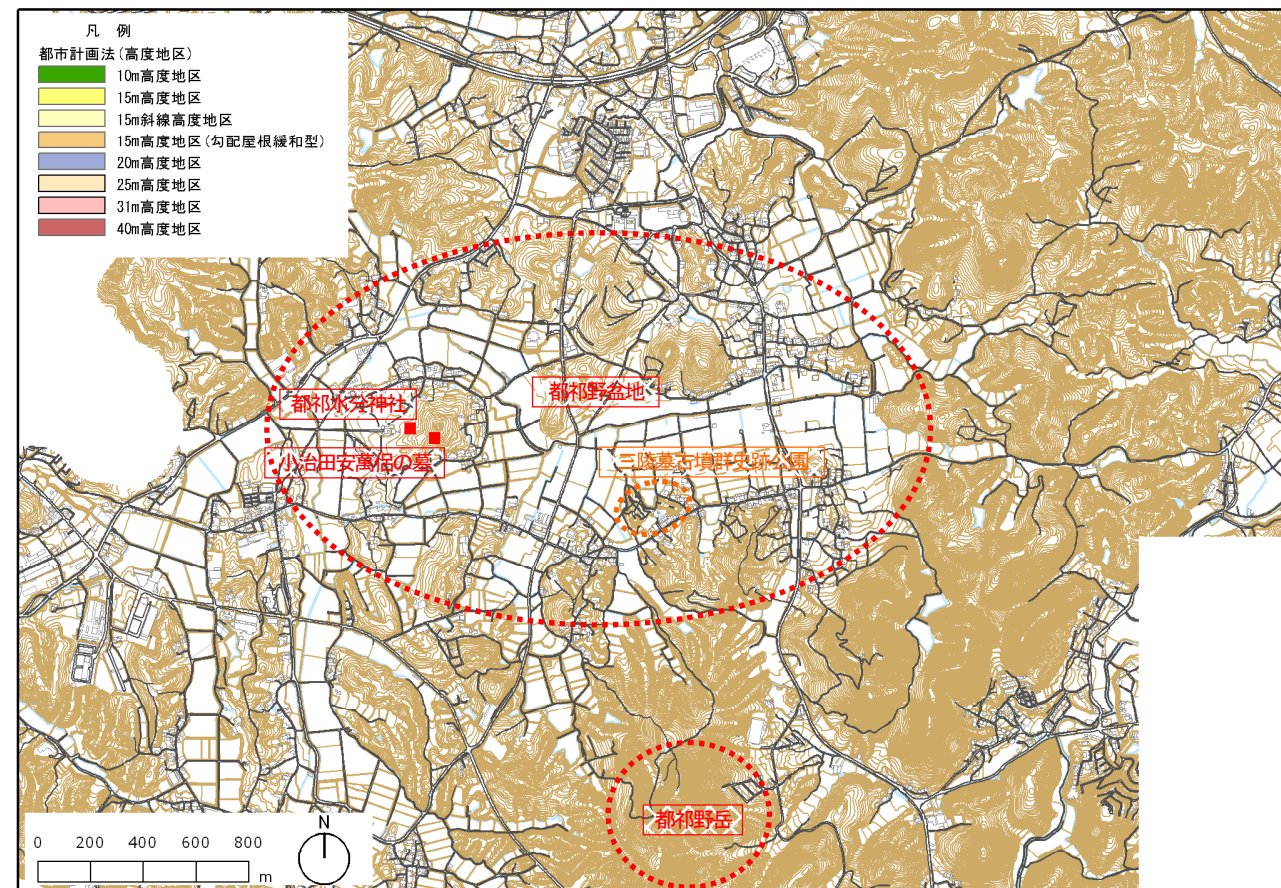
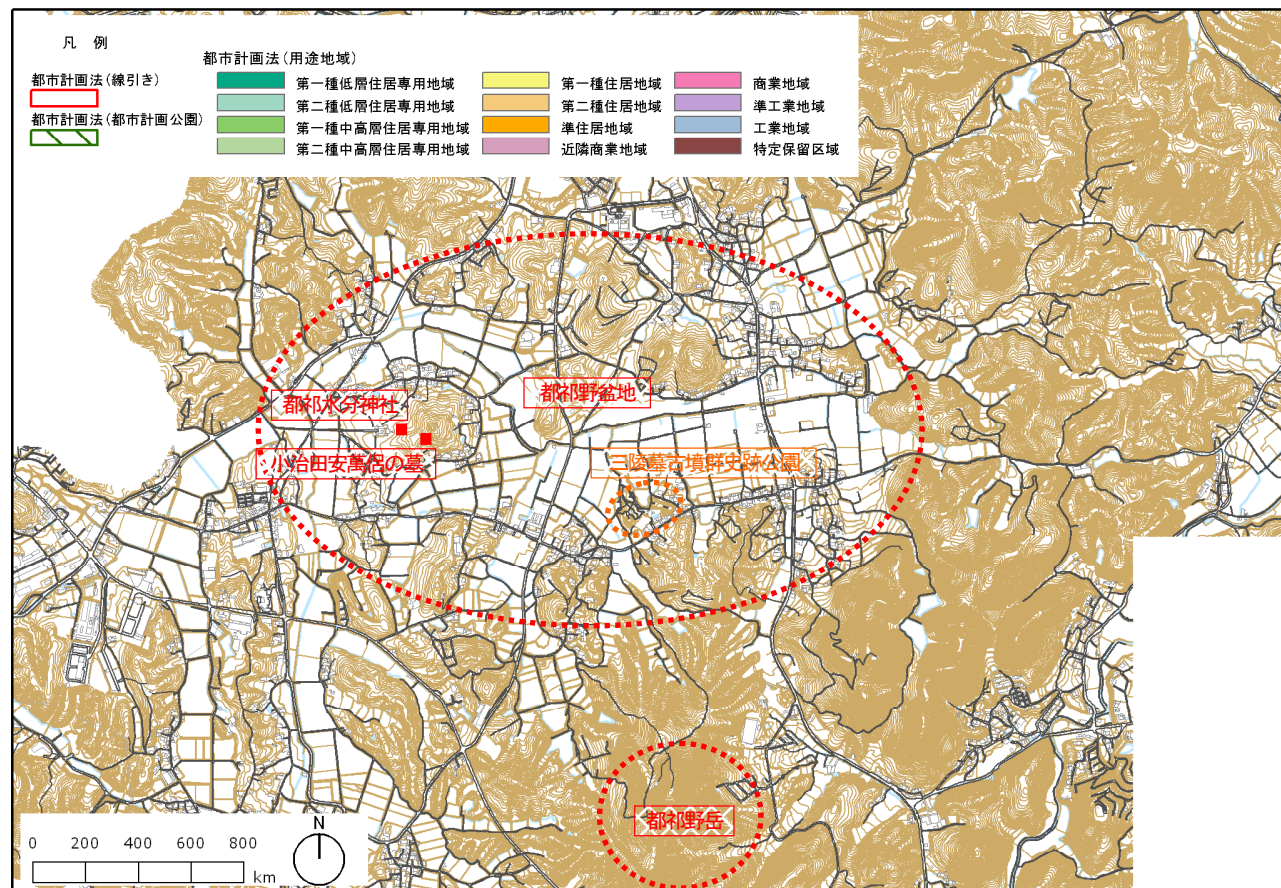
No. 37 貝那木山城跡から都祁野盆地への眺望			類	型	I：見下ろし型眺望景観
			視 点 場		貝那木山城跡
			視 対 象		都祁野盆地
			眺 望 空 間	近 景	山林、樹林
				中 景	集落、農地
				遠 景	山並み
目に見える景観の特性		貝那木山の山頂からは都祁野を一望でき、大和高原（都祁の里）の四季の景観を楽しむことができるパノラマ景が広がる。山間の比較的広がりのある平地に農地が広がり、そのなかには小丘や山地から伸びる尾根筋が地形を特徴付けるとともに、山裾を中心に集村集落が点在しており、山地―農地―集落の明確な土地利用が美しい山間農村の眺望景観を創り出している。			
心で感じる景観の特性	歴史的背景	貝那木山城 天文年間（1532～1555）に、多田延実が都祁地方一帯を支配するために築城した山城である。遺構は、主郭、帯郭、二ノ郭、西出郭、南出郭、土塁、井戸、堅堀群などから構成されており、主郭の周囲には帯郭が巡り、その北端が二ノ郭につながっている。かつての大手道は、現在、二ノ郭にある八大竜王社への参詣道となっており、大手の麓には城下町があったと推定されるが、遺跡は未確認である。 都祁の里 都祁の語源は、古代朝鮮語で日の出を意味するトキノ（都祈野）から由来している。古代には「闘鷄」と称されていたが、七世紀からの郡郷制によって「都介野郷」又は「都介郷」と改められたという。中世、この都介郷は東山内とよばれ、東山内衆とよばれる武士団が割拠しており、その有力者の一人に多田氏がいた。多田氏は宇陀郡多田庄より出て次第に勢力を拡大し、戦国時代になると福住七郷を支配した福住氏、吐山城に拠った吐山氏らと拮抗する国人領主に成長した。視点場となる貝那木山城は、天文年間（1532―1555）に、多田氏 19 代多田延実が都祁地方一帯を支配するために築城した山城であり、主郭部からは、都祁の町並みがよく見渡せ、町を押さえる要衝に築城された城であることが伺える。中世期の遺構が数多く残る平地は、中世都祁郷を理解する上で欠かせない地域である。			
	民俗文化・生活文化 文学・芸術作品 説話・伝承	貝那木山城 城主多田氏は、染田天神社の連歌会の主催者となって周囲の国人たちとの友好に努めた文化人でもあったことで知られている。貞治二年（1363）、多田順実が染田天神社を創祀して千句連歌会を主催し、千句連歌会を東山内の国人たちの年中行事とした。千句連歌会には小山戸、鞆田、白石、福住、仁興、苅原、小倉、深川、笠間、牟山、迎田ら東山内に割拠する有力国人の多くが参加している。南北朝の動乱期であり、千句連歌会を通して東山内諸将の友好を深めるとともに、政治的駆け引きの場ともなっていたと考えられている。 都祁の里 大和国北東部の山間部に位置する都祁地域は、大和地方のなかでも早くから人が住み着き、小さな文化圏を形成し、大和朝廷とは異なる文化・文明が栄えた地域とも言われている。都祁地域一帯には、山岳信仰を根本とした祀り場の跡や独特な伝承が多く残り、都祁地域の集落と山との関係に基づく文化的な景観を一望できる。			
	眺望景観の構成要素の関係	貝那木山城と都祁の里 貝那木山城は、天文年間に、多田延実が都祁地方一帯を支配するために築城した山城であり、主郭部からは、都祁の町並みが一望でき、町を押さえる要衝に築城された城であることが伺える。また、中世都介郷の主要道は三つあり、近世まで宇陀街道、都祁街道、伊賀街道と呼ばれた現在の国道 369 号線、県道 38 号線、県道 781 号線であると考えられている。この 3 本の道が都介野盆地でつくる三角形の区域に中世期の遺構が集中しており、中世都祁郷の中心域と考えられている。貝那木山城跡からは、この三角形の区域を遠方に望むことができ、中世都祁郷を理解する上でも重要な眺望景観である。また、都祁地域一帯には、山岳信仰を根本とした祀り場の跡や独特な伝承が多く残っており、貝那木山はその信仰の中心である野々神山と都介野岳の間に位置し、都祁地域の集落と山との関係に基づく文化的な景観を一望できる視点場でもある。			
情報としての景観の特性	名所案内記 絵 図 等	—			
	インベントリー	—			
			守 る た め の 視 点		高所から盆地全体を見下ろす景観であるため、その眺望を遮るような建築物や工作物の建設のおそれは少ない。しかし、都市計画区域外であり、広域幹線道路のインターチェンジにも近く、交通の利便性も高い地域であるため、大規模な建築物等が立地するおそれがある。土地利用コントロールと合わせた景観づくりが求められる。 周囲を取り囲む山林や農地などの自然豊かな景観を保全することが求められる。 （施策の方向性）B-1，B-3，E-3，E-5
			整 え る た め の 視 点		周囲の集落や豊かな自然景観に不調和な家屋や工場等がみられる。可能な限り修景していくことが求められる。 （施策の方向性）F-3
			活 か す た め の 視 点		奈良県「まほろば眺望スポット百選」に選定されており、多くの人に知られている。しかし、視点場までは、傾斜がきついためアクセスが困難である。多くの人が気軽に登ることができるアクセス道の整備が求められる。 （施策の方向性）L-1

法的 位置 付け



No. 38 三陵墓古墳群史跡公園から都祁野盆地、都祁野岳への眺望			類	型	Ⅱ：広がり型眺望景観		
 			視	点	場	三陵墓古墳群史跡公園	
			視	対	象	都祁野盆地、都祁野岳、都祁水分神社社叢	
			眺 望 空 間	近	景	水田、三陵墓古墳群	
				中	景	水田、家屋等	
				遠	景	都祁水分神社社叢、小治田安萬侶の墓、都祁野岳、山並み	
目に見える景観の特性			墳丘上に整備された史跡公園に視点場が位置しているため、360 度のパノラマ景が広がり、すり鉢状に広がる都祁野盆地の農地の広がりや点在する集落、都祁水分神社の社叢、南方の秀麗な山容の都祁野岳を一望できる。				
心で感じる景観の特性	歴史的背景	三陵墓古墳 前方後円墳の東古墳、円墳の西古墳、南古墳の三基で構成される古代都祁を支配していた一族の墓と伝えられる。特に東古墳・西古墳は、古墳時代中期の大和高原において最大クラス古墳で、重要な遺跡であることから、県の史跡に指定され、史跡公園として整備された。 都祁水分神社 大和国水分四社（都祁・宇陀・吉野・葛城）の一つで、古来から水の神として崇拝されてきた。一間舎春日造の現在の本殿は、室町中期の明応 8 年七ヶ庄の反米によって造営されたものであり、貴重な中世の遺構として、国の重要文化財に指定されている。 小治田安萬侶の墓 都祁水分神社のすぐ東に位置する。奈良時代の官僚小治田朝臣貝那木山城跡安萬侶の火葬墓で、1969 年に国史跡に指定されている。小治田安萬侶は蘇我稲目の後裔にあたる奈良時代の役人で、文武から聖武まで四代の天皇に仕えた高官であった。					
		民俗文化・生活文化 文学・芸術作品 説話・伝承	都祁の里 大和国北東部の山間部に位置する都祁地域は、大和地方のなかでも早くから人が住み着き、小さな文化圏を形成し、大和朝廷とは異なる文化・文明が栄えた地域とも言われている。都祁地域一帯には、山岳信仰を根本とした祀り場の跡や独特な伝承が多く残り、都祁地域の集落と山との関係に基づく文化的な景観を一望できる。 都祁野岳 富士山に似た山容から「都祁野富士」とも呼ばれる。頂上には竜王社が祀られ、雨乞いの神として農耕に従事する人々に古くから信仰されてきた山である。頂上から南西に下った中腹には、堂ヶ坪と呼ばれる平坦地があり、堂宇の跡を思わせる礎石が整然と残り、竹溪山寺の跡とされる。				
	眺望景観の構成要素の関係	—					
情報としての景観の特性	名所案内記 絵 図 等	都祁水分神社 寛政 3 年（1791）の「大和名所図会巻ノ四」に「水分社」がみられる。					
	インベントリー	—					
			守 る た め の 視 点		三陵墓古墳群は県史跡に指定され保護が図られているため、視点場としては、特段の保全施策は求められない。 都市計画区域外であり、広域幹線道路のインターチェンジにも近く、交通の利便性も高い地域であるため、大規模な建築物等が立地し、良好な眺望を遮るおそれがある。土地利用コントロールと合わせた景観づくりが求められる。 周囲の集落や自然環境との調和に十分に配慮した形態・意匠とするための規制や土地利用の際（きわ）の景観づくりの誘導等が求められる。 周囲を取り囲む山林や農地などの自然豊かな景観を保全することが求められる。 （施策の方向性）A-1, A-3, B-1, B-3, E-3 E-5		
			整 える た め の 視 点		周囲の景観の馴染まない建築物や工作物等がみられる。修景や景観誘導が求められる。 （施策の方向性）F-3		
			活 か す た め の 視 点		史跡公園として整備はされているが、眺望景観の視点場としては十分に認知されていないと考えられる。積極的な情報発信による観光資源としての活用が求められる。 （施策の方向性）J-1		

法的 位置 付け



No. 39		月瀬梅林の眺望		類	型	VI：生活・生業型眺望景観
						

法的 位置 付け

